

# 私はこう 考える

幼児期は「準備期」?

## 今が、一番

松木正子  
(大学教員)

はじめに

現在、学校教育は六・三・三・四制であり、幼稚園や保育園といった幼児期は、そのプレ時期と扱われている。この観点でのみ幼児期を述べるとしたら、「幼児教育は学校教育の準備期である」と位置付けられるだろう。だが、それはあくまでも制度上のことである。では、幼児期と学校教育とはどのようなになっているのだろうか。

### 小一プロブレム

小学校では、「小一プロブレム」という言葉が使わ

れている。小学校に入学してくる子どもたちが、学校教育になかなか適応できず一斉学習が成り立たない。あるいは、学校嫌い、学習困難といった問題を起こしている。このように小学校での対応がついていけないという実態から生まれた言葉である。そのために対応として、自治体によっては、一、二年生の低学年を少人数学級とし、通常四十人が定員のところを、三十人もしくは二十数人とかなり少なくして学級編成を行う配慮がされるようになってきている。また、担任補助がつく学級もある。

このような実態から、小学校から幼稚園に対して、入学前にはこれだけのことをしておいてほしいとい

う要望が出されるようになった。その結果、いつの間にか、幼稚園は学校教育の準備という意識が芽生えていったようである。

保護者からの要望も、学校教育の先取りを意識したような「指導」を求めてくる。一斉指導になった時に困らないようにしてほしい。文字が書けないと学校でついていけないのではないかと文字指導が取り入れられるようになる。計算ぐらいできなければ遅れるのではないか……。このように、保護者の不安が拍車を掛ける。

### 幼小連携

お茶の水女子大学は、附属の幼稚園と小学校が隣接している。もちろん学校教育と幼稚園教育とは、「教育」と「保育」の違いがあるのだが、開発研究などをきっかけに幼小連携の共同研究をしてきた。このような研究は常になされるといふわけにはいかない。そのような時にも機会をとらえて互いの指導や保育を参観するように心がけてきた。また、一年

生と年長児との交流を通して、互いの実践を学び合うようにした。

研究で大切にしたのは、小学校の準備期として幼稚園教育を位置付けることはしない。幼稚園で培った能力を受けて、小学校ではどのような入門期を用意すればよいか……。子どもたちが学校教育に適応し、その子たちのより良い学びを構築することができ、そのことを第一に考えよう、というものであった。

ではこのような視点に立った時、小学校に入ってくる子どもたちに、つけておいてほしい能力とは何だろうということになる。

- ・話を聞く態度が育っていること。
- ・自分の物の管理ができること。
- ・自分の物と他の物との区別ができる。
- ・服の着脱ができ、たたんでおける。
- ・食事のマナーができていること。

このように書くと、幼稚園で学ぶというよりも、生活する上で必要なことだということになる。その通りである。小学校の教育に必要なのは、小さい

ころから習慣として持っているとい能力なのである。このほかには、身体機能として、

・しなやかな体の動き

が挙げた。何をもって「しなやか」と考えるかというところ、障害物の前で体をかわすことができる能力であり、片足や両足で跳ぶことができる能力である。つまり、自己防衛の身体能力があるかということであった。これらは、鬼ごっこや石蹴り、かくれんぼといった伝統的な遊びの中で自然と身につけてきた能力である。飛び石を一つずつ跳んでみせたり、細い塀の上を歩いてみたりしたもののだが、このような体の使い方の基本は、幼児期におこななければならないことだろうと考えた。同じように、

・逆さ、ぶら下がり

の体験も持つておくほうがいい。

・虫捕り、おままごとなど何でもよいので、興味を持つて熱中して取り組む体験を持つていこと。

これは、自発性を大切にしたいという現れである。

・人とかかわることができる。

人を思いやる、人と共に仕事ができる、共にいことに喜びを感じることが出来る。これらは、社会生活を営む上で大切な力であろう。何でも同調しようという態度ではなく、協同する個であることが前提である。

こうして挙げていくうちに、幼児期に身につける力というのは、自転車に乗る能力のように、一度体験すると一生涯についているものであることがわかる。幼児期に体験しておくこと、身につけることは、一生涯についている力なのである。

### 「今の私が一番好きです」

悩み多き年ごろに友人から送られた一通の手紙。その末尾に「今の私が一番好きです。」と書かれていた。それまで、自分というものに対してこのような言葉で考えたこともなかった私にとって、自分をこのような観点で見るとは新鮮な驚きであった。それ以後、この一言は今に至るまで、自分を省みることな言葉になっている。

「今の私は一番好きと言える私なのか」。仕事を一段落させた時、旅行をしている時、ふっとゆとりの時間が持てた時など、自分に問う言葉となった。それは、自分なりに精いっぱい生きているか、生きようとしているか、心に屈折したものがないか、充実しているのか。そんな自分を振り返る貴重な言葉である。

## 幼児期

幼児期の子どもは常に「今の自分」が好きである。とにかく遊び、探求し、一時もとどまることを知らないように見える。喜び、怒り、悲しみ、どんなことにも興味を持つて楽しむ。もちろん子どもなりに悩みや苦しみもあるだろうが、全身全霊で「今」を生きている。そのように精いっぱい生きている時は、自分を振り返る必要はない。幼児期は、今日を後悔しないようにとか、未来の自分のためになどと考えず、思いっ切り「今」を生きればよい。

鬼ごっこをして園庭をかけ回る。草原で虫捕りに

夢中になる。どう育てようかと図鑑を見る。どれも楽しいから、興味があるから……と、自然に全力で取り組む。これが幼児期であろう。そこには「今」しかない。今、今を充実させることこそが幼児期のありようで、それ自体が完結した「生きること」である。それを準備ととらえたとしたら、人の一生は常に明日の「準備」である。

## 校歌

縁あって、講演会場がたまたま私の母校になった。六年生の二学期に転校して来てわずか半年ほどで卒業した「母校」である。だが、昔の通知表に書かれていた歌詞を見ているうちに、旋律が浮かんできて歌うことができた。何十年と忘れていた校歌である。忘れていたけれども自分を作る土台になっている。たくさんの体験の一つが幼児期に行った経験である。それを準備と言うのなら一生その積み重ねであろう。「今が一番好きです」と言える一日一日を積み重ねていく、そんな幼児期を過ごしてほしい。